

Contents

- ・会長からご挨拶
- ・ゾニサミド特別寄稿
- ・事務局から
- ・Transmitter(essay)
温故知新
前程万里
- ・新評議員自己紹介
- ・編集後記

JSVN Letter

Volume 5
November 1, 2020



会長からご挨拶

今年度の学会運営について

獣医神経病学会会長
岩手大学農学部 共同獣医学科
宇塚 雄次

皆さま、日頃より学会運営にご協力いただきまことにありがとうございます。今年は新型コロナウイルス感染症の猛威により、多くの学会が中止になり、皆さまの日常生活にまで影響が出てきていることと思われます。私たちのところにおいても、講義はオンライン講義で対応するだとか、懇親会、送別会などは居酒屋を使わずに学内での飲食で済ませている現状です。

今年度はコロナ禍の影響によって神経病学会も中止という判断をいたしました。とくに今年度は沖縄開催の予定であったために、楽しみにされていた先生も多くいたことと思います。しかし、感染リスクとともに移動の問題を考えると中止して良かった、と考えております。沖縄での学会の開催は今後、次年度になるかどうかはまだ未定ですが、延期という形で実現を目指していきたいと考えております。

今年は学会は中止になってしまいましたが、役員の任期3年を今年度は迎えるため、現在新会長を含め役員改選を評議員会において検討しております。私は年齢のために役員を退官いたしますが、次年度よりは新会長のもとさらに有意義な本学会の活動が行われていくと思いますので、今後もどうぞ神経病学会の活動に参加していただくようお願い申し上げます。

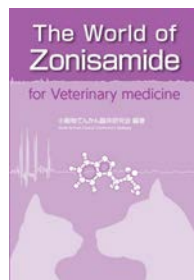
私個人においても盛岡での学会開催に始まり、あっという間の3年間でした。懇親会での「わんこそば早食い大会」は昨日のように思い起こされます。また、学会が企画した国頭先生の特別講義は、盛岡では2年目の講義でしたが、いまだに深く心に残っております。また、2年目の学会での特別講義、「脳脊髄液の流れ」については本当に驚きで、自画自賛にはなりますが、過去2年の学会は皆さまにとっても有意義であったと信じております。

今年度はまだあと半年弱ございますが、これから皆さまのご協力、ご助言を賜り、より良い学会活動を続けていくよう努力いたしますので、ご遠慮なく事務局、基礎講習部会、広報部会にご意見をお寄せいただくようお願い申し上げます。最後にこれからの季節柄、くれぐれも健康にご留意いただくようお願いして終わらせたいと思います。



賛助会員の 特別寄稿

ゾニサミドを振り返る



DSファーマアニマルヘルス株式会社
営業企画推進部 製品企画グループ
北代典幸

ゾニサミドは弊社の親会社である大日本住友製薬で1974年に合成され、1989年に発売された純国産の抗てんかん薬です。その後パーキンソン症状にも改善効果が判明し、2009年にパーキンソン病、2018年にレビー小体型認知症に伴うパーキンソニズムの効能効果を取得し、中枢神経疾患治療薬として幅広く処方されています。

さらに、動物用医薬品としても2009年から臨床開発が始まり、2014年8月に犬用抗てんかん薬「コンセーブ錠」(以下本剤)が承認されました。本剤は人体用ゾニサミドに比べると歴史は浅いのですが、多くの臨床獣医師の先生方にご処方をいただき、最近のアンケート調査では、約9割の動物病院にゾニサミド製剤(人体用および動物用を含む)が採用されています。これもひとえに貴学会の先生方から賜った以下のご支援と心から感謝を致します。

2014年から当時貴学会の副会長だった渡辺直之先生をはじめ本剤の臨床開発にお力添えをいただいた先生方による講演会の開催。

2015年に長谷川大輔先生のお取り計らいにより、初めてとなる企業共催ランチョンセミナーの実施

2019年10月に発刊した症例集「ゾニサミドの世界 for Veterinary medicine」を全国の動物病院への配布を弊社が担当。

なお、この症例集は53名の先生方が日々の診療の合間をぬってご執筆された60症例が掲載され、極めて貴重な書籍であると高い評価を頂いております。ご執筆ならびに原稿チェックに携われた先生方には重ねて感謝を申し上げます。

さて、弊社は2019年から犬の特発性てんかんや認知機能不全症候群に対応したペット用療法食ピュリナ プロプラン ベテリナリーダイエット「ニューロケア」のプロモーションを開始しました。「ニューロケア」は配合している中鎖脂肪酸により、てんかんの管理を目的としたもので、抗てんかん薬の副作用のリスクはございません。先生方の新たな選択肢としてご活用を頂ければ幸いです。

弊社は抗てんかん薬の創製および販売に歴史がある親会社から受け継いだリソースをベースに種々の情報を先生方にお届けすることに加え、てんかん治療目標である「発作ゼロ、副作用ゼロ、悩みゼロ」への実現に向けて製品開発に勤めます。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

事務局から

本年度は学会が中止となり、ご迷惑をおかけしております。

- 獣医神経病学会の現理事評議員は今年度で3年の任期が終了します。そのため現在評議員会では、メール会議を開催し、次年度以降の会長を含めた新執行部および役員、各種委員の選定を協議しております。今後は総会として、郵送にて皆さまのご意見をお伺いすることになると思いますので、どうかご協力のほどよろしくお願い申し上げます。
- 2021年度の学会に関しましては、会場での開催を視野に入れつつ、オンライン開催を検討しています。詳細は開催日時等も含めて未定ですので、具体的なことを決定次第、速やかにご報告いたします。
- 今年度冬期の基礎講習会に関しては、オンライン開催を予定しております(基礎講習プログラム12~17)。本年度2月あるいは3月の開催を予定しています。詳細な日程が決まり次第、メーリングリストおよびホームページでご案内いたします。
- 毎年行っております日本獣医内科学アカデミー(JCVIM)内での基礎講習会に関しては、感染症の心配などから本年度は参加しないことに決定しました。
- 今年度は多くの学会が中止になり、会員相互の交流が少なくなっております。どうぞ本会の活動に対しても、忌憚の無いご意見、ご要望をお寄せいただきますようお願い申し上げます。

温故知新

メディカル・センター西田獣医
西田幸司



1975年に北里大学卒業し父の後を継いで45年になります。
当時は小動物臨床を詳しく教えてくれる先生も少なく、海外の翻訳本やドクターを招いての講演が主体でした。その後日本も独自に大学や疾患に詳しい先生方が各研究会を立ち上げられ現在に至ります。
神経病学会は1993年4月に獣医神経病研究会として発足し、歴代会長は
初代 徳力幹彦先生(山口大)
2代 小川博之先生(東大)
3代 織間博光先生(日獣大)
4代 諸角元治先生(とがさき動物病院)
5代 宇塚雄次先生(岩手大)

で2009年4月織間先生の時より獣医神経病学会となりました。

研究会時代は椎間板、てんかんなどの診断・治療法が主でしたが現在はCT・MRI、遺伝子検査や脳外科療法も行われるようになっていきます。

一般開業医は専門医や大学と違い、クライアント、スタッフと連携し一生涯の診療行為をする現場です。また診察している動物は様々な疾患が重なるのが常であり、広くて深い視野が必要です。

今後神経病学会がさらに発展するためには、現在設立されている様々な学会と連携し、さらに人医との交流も行いながら広い視野と知識を深めていくことが重要であり、本学会がその中心となることを期待しています。

Transmitter 第5回

前程万里

「小さな喜び」

日本獣医生命科学大学 附属動物医療センター
濱本 裕仁

コロナ禍の中いかがお過ごしでしょうか？大学ではオンライン授業の実施など様々な授業形態の変更があり変革の時期だったと感じます。私もステイホームを実行し仕事が終わればまっすぐ帰宅する生活をおくっています。家ではもっぱら映画を見て過ごしましたが、「一生に一度は、映画館でジブリを。」というキャッチフレーズに負け、一度だけ映画館に足を運びました。体温チェックやマスク着用の徹底した感染対策があり何か窮屈な感じも受けましたが、ソーシャルディスタンスの確保のため隣の席は空席でゆったり映画を見ることができました。新しい生活様式の中には小さなことですが良いことが隠れているかもしれないと前向きに取り組むことができそうです。

感染に関しては特に高齢者との接触は気をつけなければならないと聞きます。私は毎年のお正月には祖母とのツーショット写真を撮っています。このディスタンスはどうするべきなのか...今後の状況を見て判断したいと思います。



新評議員あいさつ 第5回

東京農工大学 獣医画像診断学研究室
清水美希



獣医神経病学会評議員に加わりました清水です。私は東京農工大学卒業後、小動物の開業動物病院に就職し、その後、岐阜大学大学院連合獣医学研究科(配置大学:東京農工大学)にて学位を取得いたしました。学位取得後は再び開業動物病院に就職した後、2009年11月から東京農工大学の獣医画像診断学研究室・准教授に着任しております。大学附属の動物医療センターでは、整形外科診療科を担当しています。また、CTやMRIなどの画像診断や神経疾患の内科的および外科的治療も行っています。

大学院での研究内容は循環器疾患であったことから、神経病については不得意な印象を持っていましたが、獣医神経病学会に所属し学会に参加すると、会場の学会員の先生方の意欲と熱意に啓発されました。一方で、私の症例について親身にご指導いただくなど、会員の先生方の優しさに触れ、またたく間に獣医神経病学会に魅了されてしまいました。この度、大変畏れ多いことに評議委員に加えていただくことになりましたことを契機に、可能な限り本学会に貢献していく所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

編集後記

第4回の編集後記を見返すと、少し沖縄に浮かれた感じが読み取れます。それから8ヶ月余りで、世界は大きく変わってしまいました。今まで経験したことがないことに直面し、その都度悩み、逡巡し、不安の中、意を決して一歩進み、また未経験に直面するという具合でした。

そのような中、したたかに適応しようとする私たち人類は、最新技術を駆使(迫力あるステージの有料配信など)したり、ちょっとレトロな生活に目を向けブラッシュアップ(出前:Uber Eatsなど)したりして、また新たな文化を生み出そうとしています。たくましいなと思います。

原田マハ氏の「たゆたえども沈まず」という著書があります。これはパリの標語だそうで、「様々な困難に会い翻弄されるが、やられたりはしない」ということだそうです。パリジャン・パリジェンヌはお洒落なだけでなく、芯の強さも兼ね備えているのですね。私もそうあろうと心に留めました。

Go Toトラベルが活況を呈していますが、パリなどへの海外旅行はまだまだですし、沖縄も悩ましいところです。会員の皆様におかれましては健康にご留意いただき、さらには来年の学会開催につきまして多くのご意見をいただければと思います。



編集長: 宇塚雄次

編集委員: 宇津木真一 小澤剛 チェンバーズ・ジェームス 和田昌絵

ご意見窓口: 小澤 (ozvet@k9.dion.ne.jp)